

ことばの迷い道

悩ましい夜

くろだ けんじ
黒田 賢治

人間文化研究機構
総合人間文化研究推進センター研究員

イランで調査をするようになって間もないころ、「金曜の夜」におこなう集会に行かないか」と誘われたわたしは、予定どおりの時刻に待ち合わせの場所にたたずんでいた。約束の時間になってもいつこつに相手は来ない。調査地で待たされることにすっかり慣れていたとはいえ、さすがにおかしいと思ひ相手に電話をした。すると反対に「なぜ（昨晩、お前は来なかったのか）」と問い詰められたのである。

この行き違いは、一日の始まりと終わりをめぐる概念的な違いによるものである。ペルシア語で、一日は、日没から始まるのだ。知人とわたしが約束をした「金曜の夜」は、イランの公用語であるペルシア語で「ジヨムエの夜」であり、「金曜（ジヨムエ）」は木曜の日没から金曜の日没前ということなのだから、木曜の夜を指す。わたしが待っていた金曜の夜は、イランでいうところの「土曜（シャベン）の夜」だったのだ。

日没から一日が始まるというのは、イランに限らず、今日の中東地域で広く通用する考え方である。そのためイランの多数派の宗教であるイスラームに限らず、中東発祥のキリスト教やユダヤ教の宗教行事は日没を起点として始まる。クリスマスがクリスマス・イヴから始まるのはこのためである。こうした一日のサイクルが、人びとの話すことばのなかに織り込まれているのだ。

ところが、後の調査で二〇一〇年代前半にイラン系住民が多く暮らすアメリカのロサンゼルスに行き、イラン系のイスラーム文化センターを訪れると事情は異なっていた。英語とペルシア語でそれぞれ書かれていた宗教プログラムの案内を見ると、「Thursday Night」と英語で書かれているものに、「木曜（バンジュシャンベ）の夜」とペルシア語で書かれていた。つまりペルシア語での日のとらえ方が、英語の日のとらえ方と二対一対応するようになっていたのだ。一方で、イランの元々の一日の考え方も残されていた。イラン暦で新年を迎える前の最後の「水曜（チャハールシャンベ）の夜」には、火渡りをおこなって無病息災を願うチャハールシャンベ・スーリーという祭事がある。ロサンゼルスでもこの行事は火曜の晩におこなわれていた。そのときの英語の案内は、「Tuesday Night」となっていた。つまり、ペルシア語の「水曜の夜」と英語の「火曜の夜」が併記されていたのである。

ロサンゼルスでこうしたふたつの日をめぐる概念が使われているなかで、こんがらがったわたしはイランでおこなっていたのと同じやり方で確認するようになった。間違いないように「その〇〇曜日の夜というのは、××日の夜という意味ですか」と確認する方法だ。わたしがしばしば非イラン系の人びとも同じように確認したため、怪訝な顔をされたことは想像に難くないだろう。